(2)(1)を実現するための課題は何か。

・今までの「50kmハイク」は距離が長く、コースの途中に坂や階段があり車椅子の人には単独での参加は難しかったので、段差のないコース設定が必要である。

・障害者の参加者がいるとその人にスタッフの目がいきやすく、現状のスタッフの人数では競技者全員に均等に注意がいかなくなり、事故につながる危険性が増える。

・平成7年度の参加者690人に対して、ボランティアのサポーター約200人体制でもサポートに余裕がなかったので、ボランティアの増員が必要である。

・現状のボランティアの人数では、障害者をすべてサポートしきれないので、障害者は補助者と一緒という条件が必要である。

・申込書に「50kmを歩ける健康な方」と制約を付けているのを、撤廃することはできない。

・恩返しということでスタッフをやってくれているので、これからは経験者以外にもボランティアを求めることが必要である。

(3)(2)の課題から、高齢者や障害者の参加者を増やし、50kmハイクが高齢者と若者、障害者と健常者の交流の場となるための解決策は。

・スタッフを増やすために、共催の市や教育委員会に三河湾健康マラソンのように生涯学習課の職員以外にもスタッフとして参加願う。

・次回の大会から障害者や高齢者が参加しやすいようにコース設定やスタッフの配置を行い、障害者や高齢者の参加者を受け入れてみる。そして、将来的にその参加者がボランティアのスタッフになってくれることを期待する。

歩道をふさぐ障害物

歩道が敷設された道路は、まだまだ稀少価値ですが、折角の歩道を自転車や看板などが占拠し、そこを通る人や自転車がわざわざ車道に降りている光景を見かけることがあります。これでは、何のための歩道かわかりません。人にやさしい街は、自分だけに都合のよい街ではないはずです。皆にとってやさしい街であるために、個人のわがままは慎みたいものです。

広報ヤング がまごおり(仮称)

(1)広報がまごおりのヤング版を発行する。または「広報がまごおり」にヤングページを設ける。

掲載する内容は…

・「さわやかさん」コーナー
市内の若い男女を毎回1人づつ紹介し、友達が友達紹介する。

「夢、趣味、蒲郡のよいところやいまいちのところ」を尋ねる。

・市職員の紹介
写真入りで仕事の紹介、市の計画の説明、趣味などを記述する。

・市長コラム（インタビュー形式）

・投書箱の内容を無記名で紹介し、市側の対応・答えを載せ、投書が一個人と市との間のやりとりだけでなく、市民全体とのコミュニケーションになるようにする。

・投書箱を温泉旅館、駅、競艇場にも設置して市外の人の蒲郡の印象も掲載し、市民では気づかない蒲郡について考える機会にする。

・投書コーナーを設けるとともに、投書に対する投書も受け付け、若者の意見交換の広場にして、若者の政治や行政に対する無関心さを減らす。

・蒲郡技術短大生に蒲郡の印象をアンケートし、蒲郡のいいところ・いまいちのところを聞き、若者定住策を探る。

・小、中、高校、短大の行事（体育大会、資源回収、学園祭等）を掲載し「若者の情報誌」を目指す。

・行政についても、子どもに説明するように分かりやすい言葉で記述し、若者の行政に対する関心を高める。

・今の若者はマンガをよく読むため3カ月に一回の発行でもよいので、すべてマンガにする。

まとめ

以上「50kmハイク」と「広報ヤングがまごおり（仮称）」について話し合って、感じたことは、「人にやさしい街づくり」とは何なのか、人にやさしい街づくりを実現するためには私たちには何ができるのかということを何かにつけて、常に考えることが大切であるということです。

また、はじめにも記述したように、私たちのまちにはあれがないこれがないと、他市にあって私たちのまちにないものを欲しがるよりは、私たちはこうしたい、ああしたいと考え能動的に活動することが重要ではないでしょうか。